

というんですけども、こういう地震が起こります。

東北・北海道太平洋地域でM8級地震
後に関東地方で発生した地震(1)

1. 869年貞観三陸地震 M 8.6
⇒ 878年相模・武蔵地震 M 7.4
2. 1611年慶長三陸地震 M 8.1
⇒ 1615年江戸地震 M 6
3. 1793年三陸沖地震 M 8.4
⇒ 1812年武蔵・相模地震 M 6
4. 1843年十勝沖地震 M 8.0
⇒ 1853安政江戸地震 M 7.1
5. 1894年根室半島沖地震 M 7.9
⇒ 1894年明治東京地震 M 7.0
6. 1896年明治三陸地震 M 8.5
⇒ 1909年千葉県房総半島沖地震 M 7.5

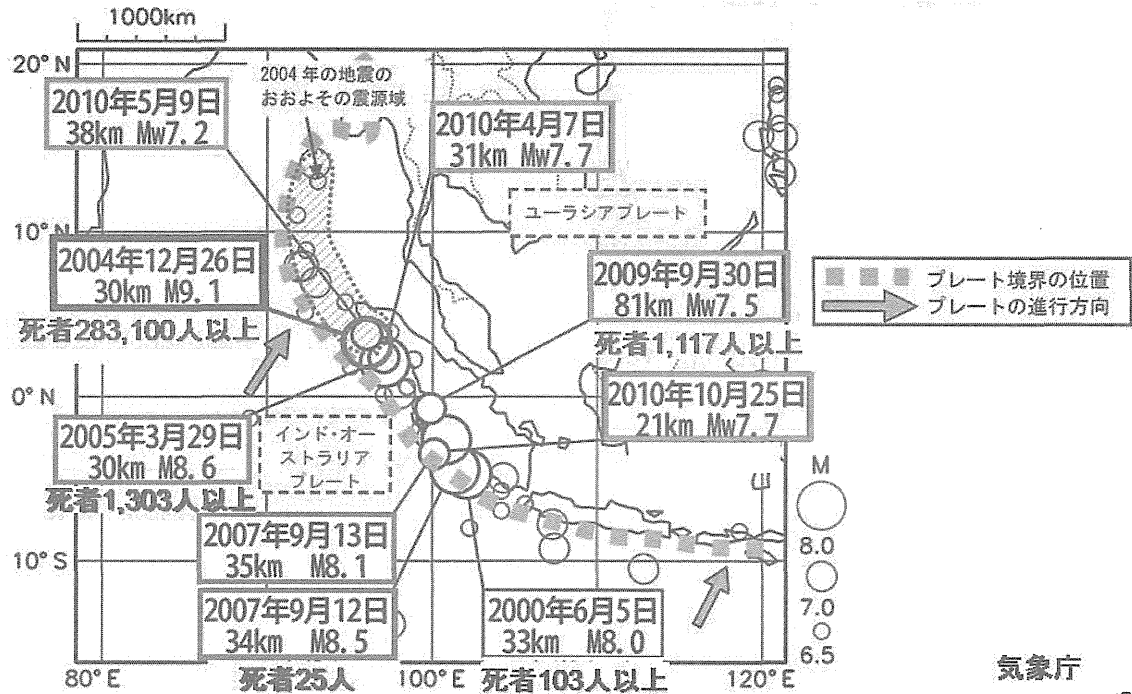
1896年の明治三陸地震の後は、その37年後に大きなアウターライズ地震が起きて、これは昭和三陸地震と名付けましたけども、こういう、37年間たってからということもある。一方で、2006年の千島列島沖の地震は、3ヶ月後にアウターライズ地震が来たということで、いつ来るかまったくわからない。けれども、来るという地震です。これに備えなければいけない、というのがあります。

東北・北海道太平洋地域でM8級地震
後に関東地方で発生した地震(2)

7. 1918年ウルップ島沖地震 M 8
⇒ 1923年関東大震災 M 7.9
8. 1933年昭和三陸地震 M 8.1
⇒ 1938年茨城県沖地震 M 7.0
9. 1952年十勝沖地震 M 8.2
⇒ 1953年房総沖地震 M 7.4
10. 1994北海道東方沖地震 M 8.2
⇒ 2000年伊豆諸島地震 M 6.5が2回
11. 2003年十勝沖地震 M 8.0
⇒ 2008年茨城県沖地震 M 7.0
12. 2011年東日本大震災 M 9.0

それから、前は、防波堤なり防潮堤なり、いろいろ設備がありましたけど、今すっかり壊れていますので、地震津波が来ると非常に厳しい状況です。

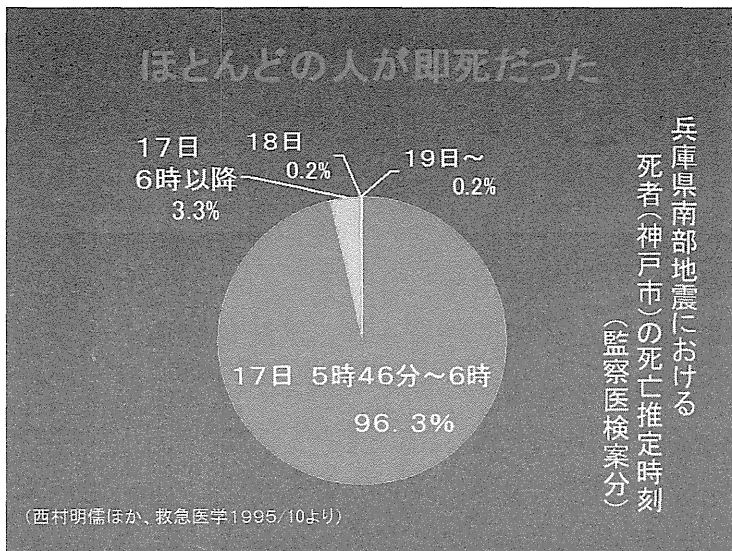
余震はいつまで続くか？ インドネシア・スマトラ島西方沖地震



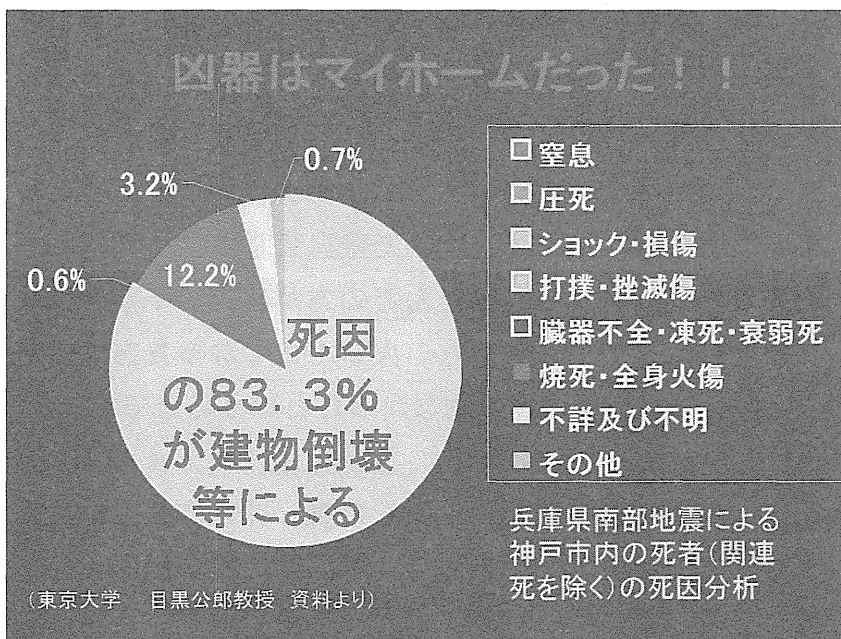
まだ嫌なデータをお見せしなければいけないのですが、日本列島と同じように島を描いているインド洋、インドネシアのスマトラ島の地震です。スマトラ島西方沖地震という地震が、2004年の12月にマグニチュード9.1という地震がありました。死者としては、28万3,100人とされていますから、津波を知らないということは恐ろしいことです。

その後、これだけ巨大地震が起こるとどうなるかということ、2005年に…これは3ヶ月ちょっとたった時に、マグニチュード8.6、また2年たってマグニチュード8.1、8.5、マグニチュード7、7.5、7.5、7.2と、7回もマグニチュード7以上の地震が起こっていて、そのうちの3回はマグニチュード8以上の巨大地震という状況でした。日本列島と非常によく似た地形のところで、実際にはこういうことが起こっているということでした。

さらに続けますと、太平洋地方でマグニチュード8級の地震が起こった後、関東地方ではどういうことになっているかということ、11回の本震がありましたけど、11回のうち9回はマグニチュード7以上の地震が起こっており、関東地方で2回はあったというようなデータもあります。



ちょっと、こちらの画面を見てください。これは、阪神淡路大震災の死亡者の死亡推定時刻です。



どういうリスクがあるかという、まず、障害者の場合、特にこういう家具が倒れてくる、ここでけがをするリスクが非常にあります。それから、1階のほうが潰れやすいですから、古い木造の1階に住んでいると、1階が潰れる可能性が非常に高いと思います。潰れるとすれば1階から潰れます。それから、火災があります。火災から逃げなきゃいけないですね。もちろん津波のリスクがある所は津波から逃げる。

阪神淡路大震災の例でいきますと、ほとんどの方は即死です。今回の東日本

大震災で亡くなった方は、ほとんどが水死です。それぞれの災害によって亡くなられ方も違いますが、即死ということはどういうことを意味するかというと2つあります。1つは、救助活動が非常にうまくいったので早く救助ができたので、多くの方が助かった。もう1つは、救助活動では助からない命がこれだけある、と。両面の見方ができます。阪神淡路大震災の場合は、むしろ、救助活動では助からない命があると。いくら隣近所仲良くしてようと、個人情報持っていようと、あるいは、救助の道具を持っていようと、消防車が早く来ようと、自衛隊が来ようと、即死の人は助からないわけですね。そうすると、即死の人の対策をやらなければいけない。

なぜ人は死ぬのか。一番大きかった原因は窒息死だったんです。多くの場合は、家の1階に寝ていて、そこに大きな梁（はり）とか屋根とか、そういう重い物が胸にドンと乗ってきます。それで横隔膜が上げられなくて、呼吸ができなくて亡くなったという方が半数以上です。寝てて、想像してみてください。朝の5時46分です。いきなり、ドーンときて、うわっと思ったら重い物がドンときて、ウツときたらそのまま息ができなくて、3分とか5分とか生きてから亡くなる。非常に無念でしょうね。

火事で亡くなった方が12.2パーセント、32パーセントの方はすっかり骨になってしまったので、火事で亡くなられたのか、建物で窒息死して亡くなられたのか全然わからない、死因がわかりません。ほとんどの方が建物の下敷きになって、あるいは家具の下敷きになって亡くなった。火事で亡くなった方は、逃げ遅れたのではなくて、下敷きになって逃げられなかったということです。

関東大震災という震災がありました。この震災は、地震直後に1万4,000の方が即死です。この人たちは助からないでしょう。その後、非常に大きな火災がたくさん発生して、9万人の方が焼け死にました。原因はいくつかあるんですが、昼時に起こって皆火を使っていたということと、不燃化率が、当時は1パーセントぐらいしかない、みんな木造で燃えやすい建物だったということで、火災が拡大したというんです。

阪神淡路大震災では、反対に朝5時46分で、みんな家にいて、なおかつ、みんなが家にいたから帰宅困難とか安否確認とかという問題が、総体的にもものすごく少なかった。それで、みんなで助け合って火を消したんですね。もちろん、火も使っていませんでした。それでも火を消して、初期消火が非常にうまくいった。雑居ビルなどで初期消火がうまくいかなかったところで、火災が起こっ

た。そういうような例はあります。あるいは建物が潰れすぎてて、火は出てるんだけど、火を消すよりも人を助けたほうが早い、助けなきゃいけない、というので。それで亡くなったという方もたくさんいらっしゃいます。

命を守る地震対策の優先順位

事前対策

1. 住宅の耐震化！
2. 家具止めなど室内の安全化！

●緊急地震速報の活用⇒～地震～

直後対策

3. 津波から逃げる！
4. 初期消火！
5. 救助！

そうすると、命を守るためにはどうすればいいか、ということなんですね。一番大事なのは、やっぱり住宅の耐震化です。耐震性のある住宅に住むということはものすごく大事です。もうひとつは、地盤の良い所に住む。これがすぐできないということになると別の手を考えないといけない。もうひとつは、家具止めなど、室内の安全化です。

本来であれば、緊急地震速報の活用ということで、緊急地震速報が鳴って、木造住宅の1階に住んでいたら、机の下ではなくて外へ出てください。机ごと潰されますので。特に、この会議室にあるような机は簡単に潰れます。

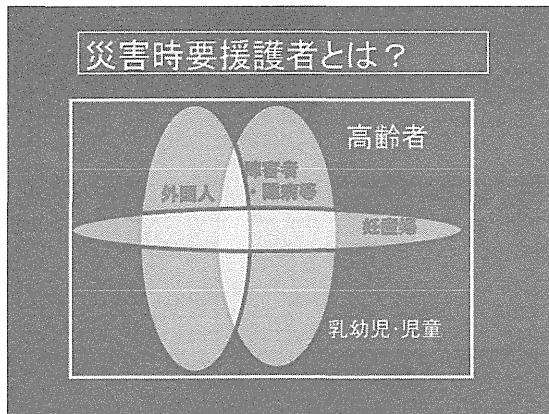
ただ、障害者の場合は、緊急地震速報に気が付いてから脱出するまでに、知的なハンデがあってできなかつたり、あるいは車いすに乗って行くとか、いろいろ問題があって、この部分が非常に難しい。従って、安全な場所に住むのが、まず、命を守るためには必要ななんですね。

その次に、直後対策ですが、津波がある場所は津波から逃げなきゃいけないですね。あとは火を消すということ。家の中にいて、隣のうちから火が出ていて消す人がいなければ、いつか自分も焼け死にます。そういう時は初期消火が必要です。そこから救助活動ということになります。

障害者の方を救助するということの手前で、まずは、家が潰れないこと、家具が倒れないこと、火に巻き込まれないこと、といったようなことをしていかなきゃいけないです。

典型的な要援護者で、高齢者になって足が不自由なので車いすに乗っている場

合があります。これに認知症が入ったりすると、判断力も低下していますので、かなりサポートがないと動けないということになります。この状態で一人で車いすを運ぶことは非常に困難ですね。一人で動ける方と、必ず支援が必要な方がいらっしゃると思います。



今まで、災害時要援護者で特に断りもなく使ってまいりましたけれども、一般的には、このように高齢と乳幼児と障害をお持ちの方、それから、妊産婦さんというような形となります。これまでの防災訓練というのは、どちらかという元気な人たちなのです。本来的に言えば、災害に弱い人を対象にした防災訓練に変えていかなければいけない、ということになります。

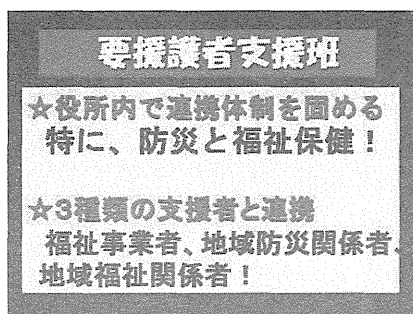
災害時要援護者支援の全体像

★事前対応の7段階

- ①内部体制の整備
- ②関係機関との連携
- ③情報伝達体制の整備
- ④災害時要援護者情報の収集
- ⑤個人情報共有化
- ⑥避難支援プランの作成
- ⑦訓練・見直し

防災、先ほど救助では助からない命があるということですから、ひとつは救助では助からない減災対策。まず、救助のプロにってもらう減災対策。もうひとつは、救助活動、別の言葉でいえば避難支援ということになるわけです。

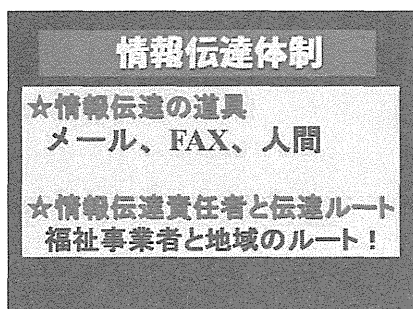
災害要援護者支援の全体像をここには7段階で書いてありますが、モデルプランでは10段階としていますので、これはいくつかまとめました。



わたくしは、区役所にいました。区役者は建て直したんですよね。ものすごくしっかり建ってたわけですね。要援護者支援に関しては、一緒にグループを作りましょう、ということが、これが役所内での第一歩です。それから、支援者を、どうしても地域の方と限定するんですけど、それだけではないですね。例えば、福祉、自立支援法の支援を受けている方は、利用者さんも立派な支援者ですね。それから、消防団とか、そういう方も支援しています。それから、一方では民生委員さんとか、そういう福祉的な活動されてる方も支援者ですね。

こういったいくつかの支援者と連携をする。都市部で地域のコミュニティが弱いので、地域のコミュニティを強くするほうが早いのか、利用者さんとの連絡を密にして、いざという時は、利用者さんのサポートするほうが早いのか、それぞれあると思います。

地域とのコミュニティも重視し、また、利用者さんとの連絡体制も良くし、例えば酸素マスクが手放せない、という人は、電力会社とよくコンタクトを取ってみて、いざという時は電力会社が駆け付ける。それまでは、電力がなくても自分でやれる手段を講じるというようなことを考える必要もあるわけです。そういうふうにと考えると、結構多様です。



情報を伝える。メール、ファックス。メールが多いですけども、視覚障害者にとってみれば、メールだろうがファックスだろうが見えませんが、「これはもう、人間だ」となります。単線のルートで考えると、それが駄目になると全部駄目になるので、複線的なルートを考えます。2通り考える。ひとつは、福祉

事業者。事業者です。もうひとつは、地域のルートという発想。さらには、町内会、自治会。あるいは消防団といくつものルートを利用してます。どれかのルートに引っかかる、という風に考えます。

情報伝達の先進事例

- ① 防災行政無線を聞けるラジオ(熱海市)
 - ・原価735円、販売価格200円
 - ・4万市民で1万台販売
- ② やさしい日本語で情報伝達(弘前大学)
 - ・避難してください⇒逃げてください
 - ・断水や停電⇒水と電気が使えません

あまり高い建物が無いところでは、無線を聞けるラジオというのを、今いろいろ売り出しています。都心部では、東京では厳しいんですね。建物、なかなか防災無線も聞けないですけども、所沢ぐらいなら、防災無線を聞けるラジオというのは簡単に手に入るのではないのでしょうか。

あと、意外と「日本語は難しい」という指摘は、わたくしが被災地を何度も回っていると、「堤防が決壊しそうだ」わからないですよ。もっと言うと、「避難」という言葉もわからないという人がいます。そこで、例えば「逃げてください」とか。「断水、停電」とか、そういうこと言われてもわかんないんで、「水と電気が使えない」と。なるべくやさしい言葉で言い換えるというのも、重要なんです。

避難活動の先進事例

- ① 高齢者全員が3分以内に避難できる場所を確保(福岡市春住校区)
 - ・公共、民間施設を問わずに依頼
- ② 台風前に溢水危険地域の要援護者救出計画(練馬区)
 - ・台風情報で要援護者情報の収集携帯

水害の場合は、とにかく早く安全な場所に避難することが大切。水害の場合は。いい例としては、福岡市で「なぜ、高齢者が逃げないか」アンケートを取って聞いた。そうすると、一番の理由は「避難所が遠い。雨の日に、遠い避難所に傘さして行けるか。しかも、避難勧告が出るような大雨の中で。」こういうことですよね。「じゃあ、近くに避難所を作ればいいじゃないか」ということで、す

すべての学校区なんです、小学校区で、すべての高齢者が3分以内に避難できる場所と。町会、自治会の方と、「何かあったらこの人入れてあげてね」「わかりました」ということで3分以内に。こういうソフトウェアのチームづくりですね。

行政からすると、例えば板橋区は人口53万人います。高齢者だけで12万人、それから障害をお持ちの方が3万人。かぶっている人もいますけれども、その人たちを、15万人弱の人たちを救出するというのは、まず不可能ですね。不可能です。職員は3,500人ですよ。

「15万人以上の方をどうやって助けるのか」ということを考えるよりも、「どこがまず傾向としては溢れるのか。どこが決壊して床上浸水になるのか。どこが一番最初に溢れるのか」という情報を押さえて、そこにいる高齢者や障害者の方から順番に避難させる。

事前に、何度も何度も水害に遭う場所って決まっていますので、それからハザードマップなどを使って救出計画を作る。



② 新潟豪雨での洪水被害の様子 (2004/平成16年7月14日)
(出典：新潟県HP)

(地域科学研究会「災害弱者の救援計画とプライバシー保護」 2007 より転載)

救出というのは、こういう状況ですから。これが50センチです。50センチでこれだけ。もう、この中を、普通雨が降っていて、この中を避難して避難所まで行くというのは無理です。かえって危ないです。



③ 真夜中に避難する住民の様子 (2004/平成16年7月13日)

(地域科学研究会「災害弱者の救援計画とプライバシー保護」 2007 より転載)

1メートルとなると、こんな状況です。ここに障害をお持ちの方を乗せて、雨の中でボートに乗せて消防団の方が命がけで避難させなければいけないというのは、日本全国、あちこちで毎年毎年ある光景です。たまたま、首都圏ではありませんけれども、もちろん、いつなっても不思議はないです。これは、堤防が切れるとこういう状態になるんですね。

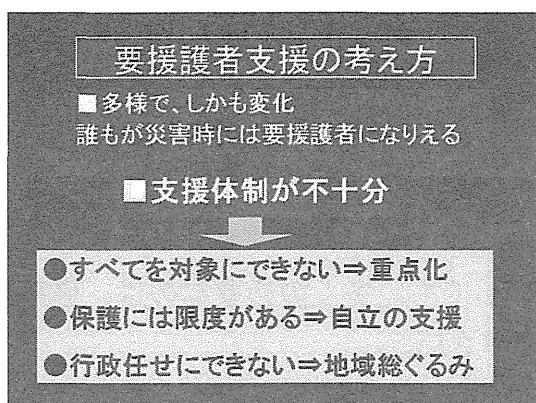
あるボランティアからのメール

**★仮設の多くが和式トイレで
つかまるところもないので、
ある後期高齢者が便器に
はまって汚物まみれになって
もがいていた……**

今度は、避難が終わった後に、生き残った後にまず最初に、どうしてもトイレの問題がすぐきます。仮設トイレを作っても、仮設トイレってものすごく不便です。これはものすごくいいトイレですね。これくらいのトイレだといいいんですけども。

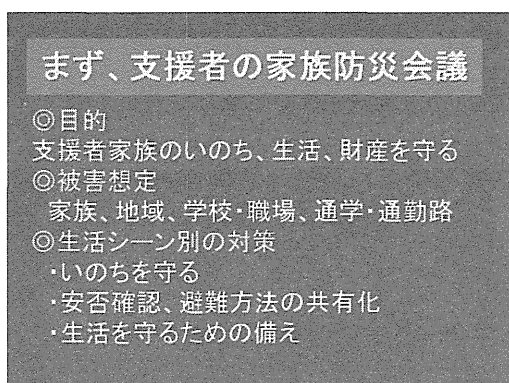
仮設トイレで和式ですと、つかまるところがなくてお年寄りが便器にはまって

しまった。うめき声をするので「大丈夫ですか、どうされましたか」と言って、それで、「ちょっと大変です」と言って入ったらこういう状態になっていて、拭いて差し上げた、ということなんです。本当に厳しい状況になります。特に、障害者のトイレは非常に難しい問題です。このトイレだって、使えないですよ、車いすの方はね。

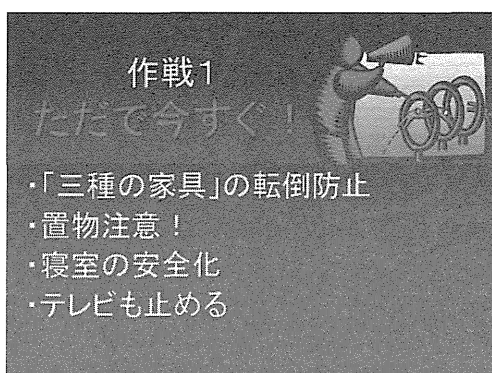


それで、やむを得ないので、とにかく一番効果的に助けるにはどうすればいいか考えたんですが、「まず重点的に大変な人からやっけていこう」と。とにかく大変な人からやっけていこうと。

それから、「保護には限度がありますので、やれるところは全部やってもらいます。やれないところだけ保護します」というようにしています。それから、もちろん行政や福祉事業者だけでは足りないの、地域全体で保護しなければいけない。それでもたぶん足りない。

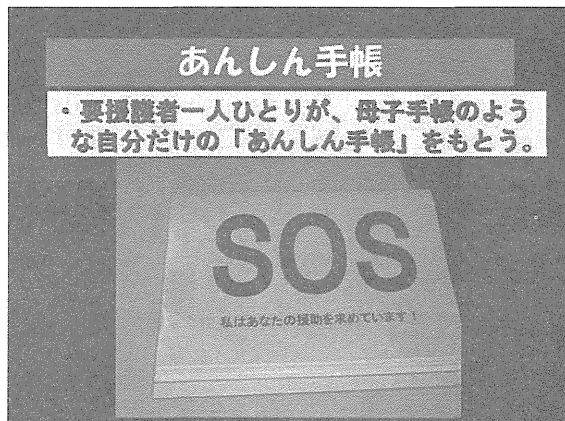


ちょっと話がずれて。これは町の人向けの防災会議です。町の人はず、自分で応援するほうがやられてしまったのでは大変なので、「支援者が家族で防災について考えましょう」ということを、よく話をします。



実は防災対策は、耐震化はお金が大変かかります。しかし、それ以外の防災対策って、実は本当に安いんです。それ以外、発電機買うとかは別でしょうけど。それにしたって、10万円とかの話ですよ。発電機は別ですね。あとはもう、数百円単位の話ですね。ご飯にしても水にしても。多くの必要なのは、備蓄と情報なんですけれども。実際に考えてみて下さい。

情報というのは、実は家族の、例えばお薬であるとか、それから、家族のいる職場の電話番号であるとか、家族の友人の電話番号であるとか、通っている病院の番号であるとか、お医者さんの名前であるとか、そういう個人情報です。後ほど紹介します。



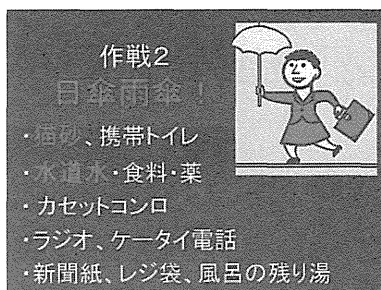
このSOSファイルというのに、細かく、こういう物が必要ですよ、と書いてあります。今のうちに紹介してしまいませんか。

これは、福岡県の知的障害者のお母さんたちが作っているファイルです。これ、何が書いてあるかというと、これは、お母さんと子どもがはぐれた時に、子どもが他の人に支援してもらうため用なんです。緊急時の連絡先とか、身体障害者手帳、親族への連絡先、関わっている人、居宅支援の方法、福祉支援の方法、医療関係、かかりつけの病院、病歴、それから使用している舗装具と福祉器具、といったようなことがあって、そのあと地図があったりスケジュールが

あつたり、「一人でトイレができる」とか「爪切りができる」とか「ご飯で食べられないものは何か」とか、そういうことがズラッと40枚書いてあるわけです。

これ作るのは、このファイルは百円均一で買えますから100円でいいわけです。多くの防災対策は、非常に安いか、ただです。

家具の転倒防止はちょっとお金がかかります。ただ、本当にただでやろうと思えば、ここの下に挟み込んで立てかければいいんですね。それは確かに、完全に家具の転倒防止にはなりません、倒れるまでに時間を稼ぐということもできます。やらないよりは、挟んでおいただけで倒れなかったというのは、被災地でいくつでもあります。いくらでもあります。そういう意味で言うと、ただでできるものもたくさんあります。



それから、避難所へ行く避難じゃなく、まず自宅にいる場合を考えると、自宅にある物を使います。例えば、トイレの問題が最初に重要になります。トイレ、流れませんでは済ませませんから。小のほう流しても大のほうは流れない。そうすると、便をするんですけども、例えばどうしようもない時にどうするかというと、一般の人は新聞紙を敷いてその上で便をしてごみ袋に入れるんですね。便は固まりませんし不衛生ですね。それ、どうしようと思ってこっそりどこかに捨てに行きます。こっそり、こう、川にね。

今回の浦安市の隣の市、どこと言いませんけども、浦安市さんは凝固材を35万買って、それでどんどん、どんどん、下水道が止まっているというところの家に配って歩きました。隣の市は買おうと思ったら、全部売り切れです、在庫なくなって。買えないでいるうちに、川に捨てられました。保健所でそんなことしたら大変です。

お勧めは猫砂なんです。あれはにおいも吸ってくれる。固めるだけじゃなくにおいもとってくれて安いです。あるいは水でいえば、水道水でも十分です。

その代わり、気になる人は1週間ごとに取り換えるといいと思います。これもただです。

結構、薬が重要です。食料はあったほうがいいですけど、予備の薬は、特に障害をお持ちの方や高齢者などで、薬を欠かせないという人が、予備の薬を3日分ぐらいもらっておくか。お医者さんに話して、ちょっと長めにもらっておくか、あるいは処方箋なり、お薬手帳なりをちゃんと持っていて、自分がどういいう薬が必要なのかということを示せるようにします。

処方薬というのは、お医者さんが処方箋を書かないともらえません。もちろんそうですね。しかし、今回の東日本大震災の特例で、厚生労働省から通知が出ておりまして、後ほど処方箋を書いてもらうことを条件に、とりあえず出してもいい、という特例が出ました。出してもいいと言っても、薬局も心配ですよ。そういう人が、どういう薬使っているか、「えーっと、確かロキソニンだったと思うんですけど」って。「じゃあ、ロキソニン」って出せるかという、ちょっと心配ですよ。

ところが、前の「こうやって処方していただきました」というのがあれば、それを見て「そうですか、わかりました。何々先生が前回処方していますね。それから状況はあまり変わっていませんか」「変わっていません」「じゃあ、これと同じものを出しておいて、後で何々先生から処方箋を書いてもらいましょう」というふうにできる可能性が広がったわけです。従って、処方箋は、もらったらずちに薬屋に持って行くのではなくて、その前に一回コピーをして、それから薬屋さんに行くというようなことをする必要があります。

個人情報壁を破る

★要援護者情報を共有する
個人情報 人を幸せにする
ために使う！

国のガイドライン：平常時から要
援護者の個人情報を共有して要
援護者対策を進めるのは、明らかに
要援護者の利益である。

あと、いろいろと。個人情報の話は、かなりやっかいです。本当のことをいえば、どうでもいい話なんですけれども、今回わたしが思っているのは、放射能の騒ぎに似ていますね、個人情報の問題は。法律上でいうと、個人情報の保護の義務を負っているのは、少なくとも5,000人以上の個人情報を取り扱う方

です。法律上は、それ以外は、基本的には自治体の個人情報保護条例というのがあります。自治体の個人情報保護条例というのは、主に自治体の職員、それから消防団というか、そういう人たちを縛るんです。ですから、町会の人たちが名簿を作って自分たちで保管するのはなんの問題もないんです。法律上はなんでもない。

ただ役所が、「これ、障害者の一覧ですので、皆さんで災害時にお守りください」と言って障害者の一覧をお渡しできるかという、これは個人情報保護条例に違反しますので、審議会にかけるなり、なんらかの手続きを取らないと、それはできないわけです。役所は渡せないんです。

個人情報保護審議会にかければ、渡すことは可能です。個人情報保護審議会はどういうことを審査するかというと、「その個人情報は、その限られた地域の人以外に絶対に漏れませんね。どういうふうにして漏れないかと担保しますか。」「鍵付きの書庫に入れさせる、コピーは取らせない、などです」「では、それを破った時、罰則で決められますか」「罰則は無理ですね」「そうすると、障害をお持ちの方は、自分の知らない間に自分の情報が、誰か他の人が持っている。さらに、漏れるという危険性を常に抱えているわけですね」と、押されるわけです。そうすると「やっぱり、やめておけばそういうふうに言われる心配もないので、じゃあ、やめておこう」と、こうなるわけですね。区役所は、本人の同意なくして町の人に情報を渡すということができないという状況になります。

放射能の問題も、1マイクロシーベルトを、年間、毎年浴びたところで、ほとんど疫学的には問題はないと言われていています。もしかしたら、1ヶ月ぐらい寿命が縮まるかもしれない、というレベルです。

たばこを吸うと、4年から10年寿命が縮まるというふうに、疫学的に決まっているのに、たばこのほうは何も言わないで、「たばこを吸っている人に「放射能が危険だ」とか言われたくないな」と、わたしなんか本当に思いますね。

災害時要援護者情報の把握

- ① 民生委員等による同意の取り付け
(安城市・豊田市など)
 - ・災害時要援護者の8割程度の同意
 - ・町内会、自治会の支援で、ほぼ10割同意の地域も出てきた(国勢調査方式)
- ② 高齢者、障害者関係課で情報共有化
その情報をもとに民生委員が訪問(長野市)

それに釈然とした安心感とか漠然とした不安感があつて、なかなか個人情報の共有化が進まないというのが、実情として、わたしは非常によくわかります。国のガイドラインは非常に簡単です。平常時から要援護者の個人情報を地域の人と共有して、要援護者対策をするんです。

これは誰のためでもない。要援護者自身のものじゃないですか。要援護者の利益のほうが、圧倒的に上回ってる。だから、それはどんどんやっていいんですよ、と、ガイドラインでは、こういうふうに。僕らは現場だったので、「ガイドラインにそう書かれても、実際できないですよ、」というふうには言ったんですけど、「ガイドラインに少なくとも書いておかないと、ますますできないでしょ、」ということで始めのほうに、要援護者情報をどんどん共有しましょう、と書いてあります。

しかし、例えば、知的障害者の一覧、こういうのがネットででも漏れたら、やっぱりこれは恐怖ですね。ですから、やはり慎重に取り扱わなければいけないんだろうと思います。高齢者の場合は、比較的簡単です。高齢の場合、見た目が高齢ですから。

皆：(笑)

鍵屋：いまさらという。「なんでわたしが高齢者だとわかったんだ」わかる。

皆：(笑)

鍵屋：そういう意味では、比較的簡単な個人情報の問題でもですね、そんなに問題はない。場合によっては、住民基本台帳は、正しい目的があれば閲覧が可能ですから、高齢者について言えば、住所、氏名、生年月日、性別というのは基本情報で、住民基本台帳閲覧できるんです。手間をかければ、高齢者のリストできるんです、簡単に。

問題は障害者ですね。障害者も、比較的身体障害の場合は、見た目で見られるということもあって、この頃はかなり身体障害の方が街に出るようになって、だいぶ地域の人々の理解も進んできてる。「自分も年取れば車いすに乗るだろうな」と。「身体障害になるだろうな」という意味でも、身体障害の方とか認知症の方とかは、比較的地域で把握しています。

知的障害、精神障害となるにつれて、だんだんハードルも高くなってきますし、親御さんもあんまり情報を知らせたくないな、と思えば、だんだん隠すようになってきます。この辺をどういうふうな形で共有するか。全員がそこにいる方たちは精神障害をお持ちで、大変ななか、一生懸命頑張っているんだよ、というの、地域でもある程度わかっている、そういう地域の中に溶け込んでいけば別ですけど、一人暮らしをしていて精神障害を持っている人たちが、自分の状況を地域に提供して「わたしは精神障害者です。いざという時助けてください」と言えるかということ、とっても難しいです。

皆さんもちょっと考えていただくとよくわかるんですけども、例えば、大きい地震がきました。家の中が、ガチャガチャになっています。ちょっと片付けるの、大変かなー、といった時に、「わたしの家の中がガチャガチャなので、誰か助けてくれませんか」と、言えますか。隣近所の人に。「家の中がガチャガチャなので、もしガチャガチャじゃない人がいたら手伝ってくれたらありがたいんですけど」と言えますか。

反対のほう、考えてください。すごい地震だったけど、自分の家は大丈夫だった。けど、周りはどうも危なそうだ。「お手伝いしましょうか」と言えますか。「お手伝いしましょうか」は、言いやすいです。「お手伝いしてください」と、ものすごく言いにくい。ものすごく言いにくい。「助けてください」と手を上げるというのは、ものすごく勇気がいることだというのは、被災地に行くとなんかよくわかります。

津波で半分だけ家が残ったおばあちゃんが、娘さんか何かと一緒に、片付けをしてるんです。ちゃんと残って使える物を持って行こうとしています。大変なんです。僕らは10人くらいで片付け隊でちょっと行って、「お手伝いさせていただけますか」と。パッと見て、「いや、結構です」こう言うわけです。結構なはず、ないわけなんですよ。ものすごく大変なことやっているわけで、ものすごく大変なんです。我々が行けば1時間もあればね。けど、2人でやっていたら5～6時間かかっちゃうと思ったのね。だからちょっとお手伝いさせて

もらえればいいんだけど。「怪しい者じゃないですよ」と言っても、「いやいや、結構、結構」と言われる。

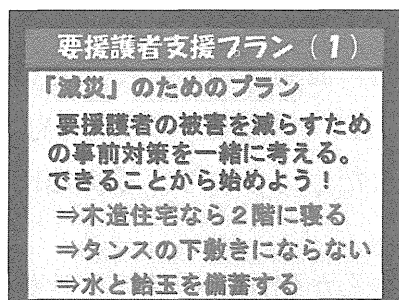
困ったなと思って、町会か自治会で役員やっている人のところに行って、その役員のうちから紹介するかたちで、「あそこに行ってあげて」「わかりました」と言って、そこでお手伝いできた、と。だから、自分から「助けて」と言うのは、非常に難しいということを理解いただければな、と。

そうすると、特に精神障害をお持ちの方とかは、やっぱり自分から「助けて」と言えるか、と考えるだけで難しいだろうということになるかと思います。従って支援者が助けられません。

この辺、具体的に、どうやればそういう手を上げられるようになったか、という研究は、わたしが知る限り、ほとんどされていません。「要援護者名簿に登録しましょう」という運動しているところもあります。

あとは、昼間作業所に行っているんで、その作業所から地域の防災訓練と一緒に参加していく、という、板橋の＝JHC＝というグループがあって、そのグループは、そういうことをなるべくしようとして、顔を覚えてもらうようにしています。それでも大変難しい問題ですね。

一応、要援護者と支援者を対応させる試みはあります。高齢の場合は、支援者も助けやすいです。自分も将来、高齢になると考えていますから、この仕組みを作るのは人のためだけではない、ということをよく知っているわけです。「我々も助けてもらいたいな」なんて言いながらやりました。

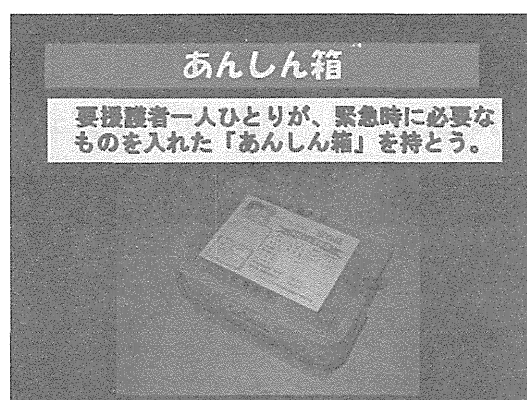


よく、国のガイドラインでも、避難支援プランと言いまして、避難の支援ですけど、避難の前にまず死なないこと。重要ですね。まず、けがをしない。それを減災と言います。災害を減らす。被害を減らすための事前対策をどうするか、という。

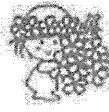
この頃、わたしが強調しているのは、前は耐震化を強調していましたが、ここまでリクスが高まっていると耐震化をする余裕がない。耐震化をする前に

きちゃうかもしれない、というふうに思っています。木造住宅なら2階に寝る。住まい方の工夫で対応してください。あるいは、たんすがこうやって、ここにこう立てかけていて、ここにこう倒れると、ここに寝ていたらたんすの下敷きになっちゃうけど、ここに寝れば大丈夫でしょ？そういうかたちで、安全な場所、安全な場所というふうを選んで、家の中で、玄関のほうは壁が少なく、潰れた時に玄関側に倒れるな、と思ったら奥側のほうに寝るとか、そういう工夫。

たんすにしても、家具止めをできる余裕がなければ、下に重いものを詰め込んで、上のほうを軽くするとか、そういったリスクを下げるような工夫をする、と。できることからやらなきゃいけない。備蓄も、いろいろ言うときりがないんですけど、まず、水とあめ玉は必需品です。水とあめ玉があれば、一晩は大丈夫です。それで次の対策を考える、というような、まず、減災が大事です。



SOSファイルのような情報、こういう情報提供をすることです。もうひとつは、安心箱といって、この頃ちょっとはやりです。社会福祉協議会さんがお勧めになっているものです。



安心箱

あんしん電話券
福祉ネットワーク

本人名	
生年月日	年 月 日 (81歳)
住所	
配偶者名	(姓)
電話	

区分	氏名	電話番号
火事・救急車	消 防 署	119
	警 察 署	110
主治医		
緊急時の連絡先	(姓)	
	(姓)	
民生児童委員		

- 準備するもの**
- バスタオル・タオル
 - 洗面用具
 - 小さいの洗面用具
 - ハブラシ、コップ
 - 石けん
 - 湯のみ茶わん・はし
 - 下着類、ティッシュ
 - 上履き (スリッパ)
 - 保険証 (写し)

福市社会福祉協議会宮田支所 (でんわ) 93-4630

何が書いてあるかということ、ここは高齢者の簡単な個人情報ですね。ここは連絡先です。消防119番、主治医さん、緊急時の連絡先、民生委員さん。

それで、箱の中には何を入れますか、ということ、これは病院のお泊りセットです。バスタオル、タオル、洗面用具、湯飲み、茶碗、箸、下着、ティッシュ、上履き、保険証。この病院のお泊りセットに水とあめ玉を入れれば、一晩は避難できます。

これ、地震災害で、避難所に長引くいるな、ということも想定できますけども、水害などの場合は、たいがい一晩避難できれば、なんとかなるんです。

障害をお持ちの方、高齢者もそうなんですけど、避難しないんです。避難する率、低いんです。避難所に避難したほうが厳しいと、よく知っています。避難できない理由をよく探すんです。「何を持って行っていいかわからなかった」

逃げるが勝ち(1)

★洪水や津波からは逃げるしかない！
要援護者は早めに安全な場所に避難するべし。
⇒正常化の偏見が敵！
⇒上手に逃げるには？

< 28 >

例えば、逃げるが勝ち。逃げるが勝ちということを知っていても、人間は行動しません。これを「正常化の偏見」というんですけど。例えば、避難